

# ゼロ〇使い魔 & コ〇ドギアス セットでズブリ

御購入ありがとうございます。

この作品は『ゼロ〇使い魔』と『コ〇ドギアス』の  
2次制作です。

性的な内容の為、18歳未満の方は閲覧いただけ  
ません。

御覧頂いて生じた問題に対しての責を負いかね  
ますので、あらかじめ御了承ください。

無断利用、転載等はお控えください。

作品の内容は全てフィクションです。

実在の個人・団体・場所等とは関係がありません。

## 目次

### その1

ルイズ(睡眠：悪戯)

モンモランシー(肉体操作：強制オナニー)

モンモランシー(肉体操作：背面座位レイプ)

### その2

ティファニア(常識変換：悪戯)

ティファニア(常識変換：レイプ)

### その3

ジェシカ(誤認：レイプ)

## その4

ティファニア(常識変換：フェラ

アニエス(平然：悪戯

アニエス(平然：レイプ°

## その1

C.C.(誤認：レイプ°

カレン(性的な行動を認識出来ない：悪戯

カレン(性的な行動を認識出来ない：レイプ°

## その2

アーニャ(価値観変更：悪戯

アーニャ(価値観変更：レイプ°

## その3

神楽耶(操り人形化：強制オナニー

神楽耶(操り人形化：レイプ°

# その4

天子(無知シチュ：フェラ

天子(無知シチュ：レイプ

全ては工口の為に！

pixiv 109018

## その1

枯れ木に花を咲かせましょう、ってな具合で学園全体に魔力素をばら撒いて暫く。

百戦錬磨と名高いオールドオスマンや、キッチン  
の守護者であるマルトーを含めた全ての学園関係者の洗脳が完了。

魔力素の扱いも経験を積んで上手くなり、初対面の人間であっても短時間で性格を変えないまま、刻まれた常識すら変えられるまでになった。

学園を囲う塀から敷地内を隙間無く、それこそ尖った屋根の天辺まで全てを濃い濃度の魔力素で覆い尽くしている。

少し前にやってきたノットとか言う貴族も、シエスタにちょっかいを掛けていたので、実際に会うまでもなく魔力素で若い女への興味を無くしてやった。

当然ながら学園を出ても体内に残った物が思考を変え続け、ノットが持つ魔力を糧に、生きている限り影響を及ぼすのだ。

しかし、学園に居る人間全ての精神を操れる状況になっても、俺は性格だけは変えない様に気を付けていた。

理由は単純で、全員が同じ人形の様に動くのは詰

まらないからだ。

やはり人は其々の性格と価値観が違っている事が一番大事。

何よりも犯す側として、性格や価値観を全て無視して無条件で従う人形では、暖かい道具で自慰をしているのと変わらない。

少し態度が柔らかくなったとは言え、相変わらずツンデレのルイズや、相変わらず胸の谷間を見せ付けて誘惑してくるキュルケ。

表面上は素直で気の良い元の性格を取り戻したシエスタ等、魅力ある美少女達を犯してこそ、この世界に来た甲斐があると思うのだ。

「ん……ふわぁ……あつと……。朝か」

目が覚めたのは、いつもと同じ石造りの部屋。

隣には、透けるキャミソールを着て、小さなローライズのショーツを履いたルイズが小さく寝息を立てていた。

アレだけ弄った胸はごく僅かに成長を見せており、パッと見は慎ましいままだが、触ってみれば確かに大きくなっているのを実感できる。

性器に関しても、幾度と無く犯されても形が崩れる事無く綺麗な割れ目を維持し、今はショーツに隠れているが柔らかい曲線を描いて布を下から持ち上げていた。

平和そうな寝顔を見ていてつい悪戯心が沸いた俺は、おもむろにキャミソールから透けている胸に手を伸ばす。

「んっ……くう……すう……」

小さな胸の頂点にある小さな乳首を指で突けば、プニッとした柔らかな感触と共に指先が胸の中へ沈む。

奥には肋骨の感触があり、その向こうには生きている証でもある心臓の鼓動が脈打っていた。

手から力を抜いて乳輪の縁を撫でるように指を這わせると、薄いキャミソールがつられて動き、乳首を布で擦る微かな感覚がルイズに送られる。

「ん……ふぁ……」

性感帯でもある乳首を刺激された所為で、ルイズ



の寝息に小さな嬌声が混じり始めた。

普段から何かに付けて犯し、軽くても身体を弄っていたお陰で、ルイズの身体は少しの刺激でも即座に性的な反応を返す。

指先に感じる乳首の抵抗は徐々に硬さを増していき、弄っている方だけがキャミソールを押し上げた。

平和そうな寝顔を浮かべていても、胸はシッカリと興奮を示し、無垢な雰囲気淫靡な空気を僅かに滲ませる。

そして、俺は手をルイズの下半身へ移動させ、ショーツの上から大陰唇を触った。

「ふっ……んっ……くう……ふう……」

軽く押せば胸よりも柔らかな感触が左右に広がり、ショーツを巻き込みながら秘裂の中へ指が減り込んでいく。

そのまま上下に指を動かせば、布の向こうに小陰唇の感触や包皮に隠れた淫核の突っ掛かりが感じられた。

大陰唇の中心辺りでも膣口に指先が食い込み、少し出し入れを繰り返すだけでルイズは腰をピクピクと震えさせる。

「んっ……あっ……」

平和そうな寝顔が股間を弄られる程に、眉が切なそうにひそめられた。

ベッドの上に力無く放り出されていたルイズの手も、ゆっくりと胸へ上がって薄いキャミソールを握り締める。

指先であっても膣口に出入りを繰り返される刺激は、確かな快感となって睡眠中のルイズを攻め立てた。

ショーツには愛液が染み込んで、白かった色が灰色に変わる。

相変わらず俺の腕の中にすっぽりと入ってしまう小さな身体を小刻みに動かし、股間からの刺激で全身を赤くして腰をうねらせる。

「あう……んん……ふうっ……！」

色っぽい吐息が大きくなると、指先が食い込む秘

裂からの愛液が、クチュクチュと音を立てる程度に量を増してきた。

そろそろショーツを捲って直接膣口を弄ろうとするが、指を動かす前に寝ていたルイズが目覚ましてしまう。

「ふぁっ……？」

うっすらと目を覚ましても、寝ぼけ眼のルイズの思考は現状を理解できていない様子。

しかし、鼻先が接触しそうな距離に俺の顔があり、股間の違和感を受けて、即座に自分が何をされていたかを察知した。

「なっ！？」

身体を密着させる距離だった俺から素早く離れたルイズは、ベッドの端へ素早く移動し、自分の股間を一瞬だけ確認して愛液で色が変わっているのを確認する。

更に、弄る対象を失って空中に止まっていた俺の指に光る愛液を見て、顔を真っ赤にしたと思えば、勢い良く指を突き付けて俺の行動を責めてきた。

「あ、あんた！　寝てるご主人様のオマ○コを弄るってどういうことよ！？」

ルイズには女性器の事を『オマ○コ』と言う名前であると教えてある。

しかし、性的に知識が乏しい所為で別名を教えられても卑猥と感じず、精々『へえ、そんな名前もあるんだ』的な感じで普通に呼び名を変えた。

俺としては恥ずかしい表情を浮かべてほしかったが、平然と言っているルイズも存外悪くは無い。

「そろそろ起きる時間だろう？ だから、肩を揺する代わりに弄って見たんだよ」

「い、いつも通りに起こしなさいよ！」

「何言ってるんだよ。肩を揺さぶって起こしたらいつも不機嫌そうにするだろ」

「それは！ あんたが、乱暴にするからでしょう！」

実際、ルイズの起こす時は結構乱暴に肩を揺さぶっているのかもしれない。

何せ、力の抜けた頭がグイングイン動くのだから……。

流石に最近ではルイズがムチ打ちにでもなったら、鞭を打たれなくなった俺も困るので手加減はしている。

「だから、今日は趣向を変えてだな——」

「なら、オマ○コを弄るんじゃないくて他のにして！」

「分かったよ。考えておく」

「本当に分かってるんでしょうね……？」

一通り朝の遣り取りを終えたルイズは、ベッドを膝立ちで歩いて俺の横を通り、床へ降り立った。

それからクローゼットを開けると、ベッドに座っている俺をチラッと見てから制服を取り出す。

以前なら俺に「あっちを向け」等と、着替えを見られるのを嫌がっていたものの、今では比較的平然と着替えをしていた。

それでも、顔を赤くする初心な反応は未だに健在で、何度見ても見ている楽しい光景だ。

「.....」

「.....」



無言で静かな部屋の中で、ルイズがキャミソールに手を掛ける。

裾から一気に捲り上げると白い腹が出て、そのすぐ後に小さく膨らんだ胸が露出した。

ルイズが眠っている時に弄っていた乳首は秘裂からの快感も残っているのか、横から見ればしっかりと尖って高さを維持している。

ショーツ一枚だけになったルイズの身体は、余り成長を見せていない。

しかし、先ほど触った胸だけは確実に大きくなっており、ルイズの姉であるカトレアを思い出せば、将来は期待できると思いたい。

母と一番上の姉の平坦な胸に負けないで欲しいと、切に願う。

「んしょっと……」

そんな俺の考えを知らないルイズは、ショーツ一枚のままでクローゼットから制服を取り出した。

キャミソールを脱いでから下着も付けずに、白く清潔感のある長袖の上着に腕を通し、ボタンを閉めていく。

ブラウスが少し小さい所為でボタンを閉めるにつれて生地が身体に密着し、乳首どころか胸の形すらハッキリと浮かび上がらせた。

前に無意識の状態を着せた制服だが、今はルイズが自分の意思で着ている。

少し暖かい季節と言う事もあり、キャミソール程ではないが生地も薄い。

ルイズは元々肌が白いので白のブラウスからでは肌が透けても目立たず、唯一、乳首のピンク色だけが透けて見えた。

全てのボタンを閉め終わると、一度身体を手で撫でてから皺を伸ばし、今度はスカートと靴下を履く。

下半身はいつも通りに短いミニスカートで、少し身体を動かせば愛液に塗れたままのショーツがチラリと見えた。

そして、マントを付けて杖を持ったルイズは、顔に赤みを滲ませながら俺へ向き合う。

「さて、それじゃ、朝食に行きませんか」

「ん、分かった」

尖ったままの乳首を浮かび上がらせる胸を張って言うルイズの姿は、何処と無く隠微な雰囲気漂っていた。

たとえ過去に身体を犯したとしても、新鮮な気持ちを失わせないのは、原作で言うヒロインの面目躍如か。

ルイズの先導で部屋から出た途端、斜め向かいの扉から凶ったようにキュルケが出てきた。

「は〜い、ダーリン。偶然ね」

「ツェルプストー！ 毎日毎日なんで同じタイミングで出てくるのよ！」

「あら、ヴァリエール、居たの？ 胸も背も小さいから気が付かなかったわ」

「む、むむむ、胸は関係ないでしょ！」

実は言うところを起す時間帯はある程度決まっている。

キュルケの部屋はレイズの部屋から近いので、決まった時間にキュルケが外の音を注意深く聞いていれば、レイズが部屋を出たタイミングを計るのは簡単だろう。

扉自体は厚いものの、廊下に響く音を完全に遮断する事も出来ない。

前にキュルケを強制的に発情させて犯した時から、キュルケは何かにつけて俺へ性的な意味でアピールを仕掛けてくる。

レイズが近くに居ればその度に一悶着起こるが、決まっていたいした騒ぎにもならない。

ちなみにキュルケの制服もルイズのようにサイズが小さく、胸が今までよりも強調されている。

前は見えなかった乳首と乳輪が浮かび上がり、張り付く生地が巨乳の厭らしさを上げた。

更には褐色である肌は白いブラウスの下からうっすらと透けており、もはや上半身裸であるのと余り変わらない。

そうなれば他の男子生徒や教員が少なからず興奮しそうでも、そこは魔力素のお陰で完全な無関心を貫かせている。

キュルケは周りの反応が薄い事に不満を抱いていそうだが、これは単純に俺の独占欲の結果なので我慢して貰いたい。

「ほら、ダーリン、ヴァリエールなんて放って置いて一緒に朝食を楽しみましょう？」

枝垂れかかる様に俺の腕を胸の谷間に埋めたキュルケ。

「ツ、ツェルプストー！ その下品な胸をしまいなさいよ！」

「あら、残念ねえ。私の胸はこれ以上小さくする事なんて出来ないのよ〜。おほほほ」

「ぐぐぐっ……！」

悔しそうに自分の胸を触ったレイズは、キュルケには何を言っても無駄だと判断して俺の手を掴んで食堂へ向かう。

身体を引っ張られれば俺の足は自然と進み、腕に張り付いているキュルケも付いて来る。

「ふん！ ほら、ちゃっちゃと行くわよ！」

「おう」

「ああん、ダーリン、待って」

「あんたは付いて来るな！」

「どうせ、私も食堂に行くんだから道は一緒でしょ」

「時間をずらして行きなさいよ！」

「いやよ。起きて最初に見る顔はダーリンって決めてるのよ」

「知らないわよ！」



威嚇を繰り返すルイズはシッカリを俺の手を握り、絶対に離さないとばかりに力を入れてくる。

たいして痛くなく、この小さなルイズの手から感じるのは確かなデレだった。

食堂へ着いても俺はキッチンで賄い料理を食べるので、貴族用の食堂の前に着くと別れなければならない。

「んじゃ、俺も朝飯を食って来るよ」

「あんたも貴族用の食堂で食べれば良いのに」

「そうよ、ダーリン。私が『あ〜ん』ってしてあげるわよ？」

「ツェルプストー！」

「あら、怖い」

魔力素の洗脳効果でルイズやキュルケ達以外の他の貴族も、平民の俺に対して何か言ってくる事は無くなっている。

いちいち煩わしい文句を言って来ない様に、魔力素で学園を覆った時、最初に手を打ったのだ。

「俺は朝からあんな脂っこい物は食べない主義なんだよ」

「そうなの？　ダーリン」

「あなた、妙な所で規則正しい生活を心掛けるわよね」

「健康な身体が資本だからな」

「あっそ」

実際、女を犯すにも体力は居るので、健康な身体  
の維持は何気に大切。

俺の答えを聞いたルイズは興味無さ気に返すと、  
サッサと食堂へ入ってしまった。

残されたキュルケはからかう相手が居なくなっ  
た事で、俺への露骨な誘惑も打ち切る。

「それじゃ、私も健康な身体を維持する為に、朝  
ご飯を食べてくるわね」

「おお、またな」

「ええ、授業で会いましょう」

マントの上からでも分かる魅力的で大きな尻を左右に振りながら、ルイズの後を追う様に食堂へ入るキュルケを見送った。

俺はいつも通りにキッチンへ向かい、この世界に来てスッカリ習慣となった賄い料理を朝食として楽しんだ。

△

気が向いた時ではあるが、朝の授業には俺もルイズと共に出る事にしている。

と言うのも、俺自身が魔法を使えなくても、魔法の授業と言う物は大変興味を引かれるのだ。

元居た世界で常識とされていた物理法則が、根底から覆される光景はとても面白い。

朝食が終わって少しの休憩を挟んだ後の、今日最初の授業。

途中で合流したルイズとキュルケを伴い、教室へ入った。

「ルイズ、あんた何処に座るの？」

「何よ、ツェルプストー。何処でも良いでしょ」

「私はダーリンの隣だから、事前に教えてくれないと困るわ」

「私の使い魔よ！」

赤い髪を色っぽく掻き上げながら言うキュルケに、朝から何度目かになる言い合いが始まる。

しかし、今日は他のキャラに手を出してみようと企んでいるので、近くで煩くされるのは困るな。

「ルイズ、今日は離れて見守っててやるから、たまにはキュルケと授業を受けろよ」

「えっ！？ 嫌よ！ 何でこんなのと！」

「こんなのって流石に酷くないかしら？」

然程、傷付いていない様子のキュルケはジト目でルイズを睨むが、ルイズも負けずに睨み返した。

このまま放って置いては話も進まないなので、ついでとばかりに教室に居る生徒達全員を含めて魔力素による命令を下す。

「ルイズもそうだけど、キュルケも『授業中は俺が何をしていても気にしないで、授業に集中しろよ』」

「.....分かったわよ」

「そうねえ、好い加減真面目に勉強しないと不味いかもしれないわね～」

結局、俺と別れて座る事になるルイズは不満そうにしながらも承諾し、キュルケは普段の授業を受ける態度を思い出して微妙な表情を浮かべた。

他の生徒達の顔も『何言ってたんだこいつ』的な視線を俺へ送ってくる。

それでも生徒達を汚染した魔力素の情報では、確かに命令を認識したと感じた。

「はい、授業を始めますので、席に付いて下さい」

良いタイミングでやってきた名も顔も知らない教師にも同様の命令を下してから、俺はルイズから適度に離れた場所へ座った。

俺の周りには適度に人が座っておらず、ある程度の運動も出来そうな空間が教室内に出来ている。



そして、俺は行動を開始した。

「モンモランシー、こっちに来るんだ」

「へっ！？」

目を付けていたのは、金髪でロールを巻いた長い髪が特徴のモンモランシー。

前に香水のビンを発見した時に草むらへ蹴り飛ばした所為で、ギーシュとの決闘イベントは無くなっていた。

それに伴ってギーシュから繋がる交友関係で知り合うモンモランシーとの顔合わせも出来ておらず、俺は当然ながら、クラスメートのルイズですら完全な他人のまま。

ルイズの様に悪い意味で目立つ事無く、キュルケの様に男からの支持がある訳でもない。

普通にクラスメートである女子の輪に居て、完全に普通のキャラでもあるが、癖の強いヒロイン達の相手をしていると、この普通さが癒しになってくる。

原作ではヒロインとまでは行かないものの、物語に深く関わるキャラクターで、間違いなく美少女。

手を出さないのは勿体無いだろう。

しかし、不思議なのはギーシュだ。

原作の様に決闘イベントで関わっていないにも拘らず、原作と同様に浮気がばれてしまい、下級生とモンモランシーに振られている。

モンモランシーには香水のビンを無くした事を攻められ、近くで聞いていた下級生が出てきて浮

気が発覚し、結果的にどちらからも愛想を尽かされた。

げに恐ろしきはギーシュが辿る運命よ。

「な、何よ、これ！？ どうして身体が！？」

人知れず、ギーシュの運命を哀れんでいる間に、指名されたモンモランシーは自分の意思に関係なく、身体が勝手に俺の命令を実行している状態で近付いてくる。

授業中であるが、事前の命令によって教師を含めて授業に集中しているので、モンモランシーが立ち上がっても誰も気にしない。

「あ、あんた！ 私に何の薬を盛ったのよ！！？」

身体が勝手に動く恐怖に顔を引き攣らせたモンモランシーは、貴族然とした態度で問い詰めてくる。

モンモランシー自身が魔法薬に精通している為、自分を襲った異変が薬の所為ではないかと思いついたのか。

「何も盛っていないけど、俺の言う事は絶対なんだよ」

「な、何よそれ！？ わ、私に手を出したらギッシュが容赦しないわよ！」

「残念。俺は公爵家のルイズの使い魔だから、生

半可な地位ではビクともしないよ」

「ぐっ……！！」

原作の知識ではモンモランシーの実家は水の精霊の機嫌を損ねた事が原因で、爵位を落とされていた筈。

その影響は経済にも出ており、仕送りが少ないと言う理由でも魔法薬を作っていたと記憶している。

正直に言ってルイズの実家がどんな地位にあっても俺に直接の関係は無いが、モンモランシーにとっては効果の在る脅し文句になった。

「ちょっと、ヴァリエール！ あんたの所の使い魔、何とかしなさいよ！」

「……………」

「ヴァリエール！ 聞いているの！？」

「……………」

首から上を回してルイズに怒鳴っても、肝心のルイズは授業に集中している。

しかも、声を荒げて誰も見向きしない状況を認識したモンモランシーは、流石に教室を包む異変に気が付いた。

「ど、どうなってるの！？」

「無駄だよ。今日は授業に集中しろと言ってあるからな」

「なっ！？ さっき言ったのが原因なの！？」

「そうだよ」

「で、でも、何で皆あんたみたいな平民の言う事を聞いているのよ！？」

「それは魔力素とか言うのが原因でなあ……」

「はあ！？」

アッサリとネタ晴らしをすると、心底驚いた様子を見せるモンモランシー。

身体を操られ、クラスメートも支配済みだと聞いて本人は驚くのに忙しかったものの、シッカリとした足取りで俺の傍へ到達する。

「わ、私に何をさせようって言うのよ！？」

恐怖心の中で精一杯気丈に振舞うが、そんな態度さえ俺の興奮を高める材料にしかない。

「一先ず、スカートを上げてパンツを見せろ」

「な、何言ってるの！？ そんな事——」

拒否の言葉を最後まで言い切る前に、モンモランシーの身体は俺の命令通りに動き始めた。

ゆっくりでも、焦らされると思わない程度の速さで腕が動き、スカートの裾を掴む。



「ひっ！？ ど、どうして！？ 止まって！」

モンモランシーがいくら腕を止めようと力を入れても、支配された身体は本人の思い通りには動かない。

そして、曝け出されたのは黒いストッキングに薄っすらと透ける白のショーツ。

「いや！！」



伸びたストッキングの向こうに見えるのは、お洒落そうな生地で如何にも女の子らしい物だった。

股間の隙間では大陰唇がクロッチを盛り上げ、厭らしい丘を作り上げる。

モンモランシーは辛うじて自由になる首を何とか動かしながら、俺から顔を背けた。

そんな、ある意味斬新な反応を見せられて興奮が大きくなった俺は、モンモランシーから見える様に指を股間へ近付ける。

「ひっ！？ やめて！ 触らないで！」

「駄目だ」

指先に感じるのは、過去に何人ものバリエーションを味わった大陰唇の柔らかさ。

胸以上に柔らかく、ストッキングとショーツの上

からでも指先を暖かな感触が包み込む。

少し力を入れるだけで二枚の生地が秘裂に食い込み、隠されていた割れ目が浮かび上がった。

「ひう！？」

女として一番大事であり、結婚する異性以外には秘匿すべき箇所を触れられた嫌悪感で声を引き攣らせるモンモランシー。

顔色は羞恥に染まっているものの、恐怖で青ざめている様にも見えた。

秘裂に食い込んだ指先を小さく前後に動かし、淫核がある辺りへ刺激を送る。

「んっ！？ や、止めて！」

包皮に包まれている淫核の感触は、興奮していない乳首と同じ位に感じた。

爪の先に引っ掛けながら刺激を繰り返し送れば、命令のままに立っているモンモランシーの足が震える。

十分に大陰唇の感触を楽しみ、俺が興奮を溜め込んだ所で次の命令を下す。

「それじゃ、次はパンツを脱ぐんだ」

「えっ！？ ひっ！ いや！」

いくらモンモランシーが俺の命令を拒否しようとも、身体は淡々と実行に移していく。

スカートを持ち上げていた手はストッキングごとショーツの横を掴むと、躊躇無くスルッと降ろした。

ショーツを掴んだ所為でスカートが下半身を隠す役割を再び果たしても、下がったスカートの中から降ろされる掴まれたショーツが現れた事で、一気に卑猥な格好になる。

ただでさえ授業中の教室でショーツを下ろす非日常の光景は、制服を着ているだけのモンモランシーから性的な雰囲気が出ている。

太股の辺りまでストッキングとショーツを下ろしたモンモランシーの腕は、命令を実行した事で腰の横で待機状態になってしまう。

「ひう……もう、止めさせて……！」

「駄目だ」

哀願の声を一蹴しながらモンモランシーの顔を確認して見れば、羞恥と、平民の俺に良い様にされている情けなさで泣きそうになっている。

目尻には涙が溜まってきているが、貴族としてのプライドが言葉だけは気丈に振舞わせた。

「くっ……あんた、絶対に許さないわ……！」

「ルイズの実家は公爵家だぞ」

「私の魔法薬の知識を舐めない事ね。ばれない様に始末する方法なんていくらでもあるのよ！」

「そうかい。それは怖いなあ」

「うくっ……」

精一杯に脅しても、俺が一切引く気が無い様子に  
歯噛みするモンモランシー。

「怖いから、ちょっとそこの机に腰掛けてオナニーをしてくれよ」

「なっ！？ 何ですって！？」

俺の命令に驚愕して聞き返すモンモランシー。

意思がどれだけ驚いても、身体だけはシッカリと

命令を理解しており、言われた通りにすぐ後ろにあった机へ軽く腰掛ける。

そして、足を肩幅に開くと、股間へ向かった手がスカートを捲り上げた。

「や、止めさせて！」

「もっと俺が見易いようにしてくれよ」

「ああ！ 駄目！」

若干、蟹股気味に開かれた足の付け根から見えるモンモランシーの最も大事な箇所。

先程俺が指を食い込ませた大陰唇は脚を開けた事で少しだけ広がり、薄暗い影の中に秘裂の中で収まっていた膣口が見えた。



秘裂のすぐ上の下腹部では、本来なら陰毛が生えていても可笑しくはないが、手入れをした様子も無く、産毛が生えている程度の綺麗な肌をしている。

「.....まだ生えていないのか」

「し、知らないわよ！」

呟く様に言ったが、モンモランシーにはシッカリと聞こえていたらしい。

顔を真っ赤にして返してくる。

「それじゃ、早速オナニーを始めろ」

「うう……！　止まって……！！」

モンモランシーも何とか腕の動きを止めようとするものの、俺の命令を実行する腕は綺麗な女の子らしい細い指を大陰唇へ触れさせた。

「んうっ！！」

手入れされた爪の先が軽く秘裂の中へ進入し、小陰唇の間を通して淫核を包む包皮を引っ掻く。

俺がショーツの上からやった時以上に力が込められている様子で、数回引っ掻いた後に親指と人差し指で摘んだ。

くりくりと捏ね回し、慣れた様子でモンモランシーが自分の身体へ性的な興奮を送っていく。

「んっ！？ ふぁっ！？ や、止め.....っ！」

俺がモンモランシーの痴態をニヤけながら観察していると、淫核を弄っていない方の手が下がっていたスカートの裾を捲り上げ、ウエストの部分に巻き込ませて股間を丸出しにした。

そのまま上へ移動した手はブラウスの胸の部分だけボタンを片手で外し、手が入る隙間を確保すると躊躇い無く中へ手を入れる。

「ひやうっ！ んぁっ！」

ブラウスの中をもぞもぞと動き出した手は決して激しい動きとは言えないが、モンモランシーが唯一自由になる頭を振り上げさせる程度には快感を送っていた。

盛り上がる布の動きから考えるに、指先を使って乳首を重点的に摘んでいるらしい。

指の動きが乳首の周りを一週回る毎に、モンモランシーの嬌声は大きくなる。

「ひあっ！ んふっ！ 駄目！ あうっ！！」

自分の意思でする自慰と違って、遠慮の無い動きが身体の敏感な箇所を刺激してくるので、快感に引っ張られる形でモンモランシーが喘ぐ。

淫核が弄られていた秘裂からが愛液が流され、既にグチュグチュと厭らしく音を立てていた。

教室の中では相変わらず真面目な授業が進められ、誰もモンモランシーの行動に見向きもしていない。

愛液を十分に纏わり付かせた人差し指が秘裂の中を下がると、膣口へ僅かに指を差し込んだ。

「ふぁっう！？ あんあ！」

第一関節までを咥え込ませ、細かく出し入れを繰り返して擬似的に犯されている刺激を受け取るモンモランシーの身体。

親指は包皮から顔を出した淫核を左右に弾き、快

感を大きくしていく。

胸を弄っている手も、ブラウスのボタンを首から胸のすぐ下まで外して左右に開き、ブラを捲り上げて胸を晒した。

「ひあっ！ 駄目！ 見ないで！」

モンモランシーの意思に関係なく露出した胸は、白く透き通る肌をしている。

乳首の色は薄いピンク色だが、興奮で赤みを増しているようにも感じた。

ピンと硬く尖った乳首を指先が弾けば、程好い大きさを持つ美乳が柔らかく揺れる。

何度か指の腹で押し潰しながら捏ねた後には、淫

核と同じ様に強く摘み、同時にモンモランシーは高い嬌声を漏らした。

「んふぁっ！ んっ！ うくうっ！！」

恐怖を浮かべていたモンモランシーの顔は性的な快楽で赤くなり、目は虚ろになって遠い所へ視点を合わせる。

身体から送られる快感で思考は白く塗り潰され、もはや俺が見ている事にも気が回っていない様子だった。

モンモランシーの秘裂から溢れ出た愛液は、ピクピクと震える細く白い太股を流れ、下になっていたマントを濡らす。

そして、指の動きが一段と早くなり、いよいよ絶

頂へ上っていく。

「あっ！ あうっ！ んくっ！ も、もう、ひぐ  
うっ！！」

愛液に濡れるモンモランシーの太股が激しい痙攣を始め、机に乗っている腰が上下に震える。

快感に染まっていた顔では目が瞼の裏へ回り、嬌声を絶えず漏らす口からは舌が食み出していた。

激しさを増していた性器と胸を攻める指の動きがピタッと止まったと思った瞬間、モンモランシーは乳首と淫核を強く摘んだ。

「んひいっ！？」



震えるモンモランシーの腰の痙攣は一気に激しくなり、指を差し込んだままの秘裂からは潮を噴き出す。

俺の命令で実行された自慰は、普段している遠慮が一切無い所為で、大き過ぎる快感がモンモランシーの思考を犯していく。

誰も居ない俺の周りにはモンモランシーから放たれる発情した女の匂いが強まり、俺の興奮も大きく高まった。

「んひうつ……！　　ひっ……！　　んんっ……！！」

絶頂で硬直した上半身とは違って、痙攣を繰り返しながら潮も噴くモンモランシーの下半身は、少し時間が経てば徐々に動きも収まってくる。

胸を曝け出して白目を向きながら舌を口から食み出させ、ストッキングとショーツを膝まで降ろされた状態でスカートが捲られた下半身はカクカクと卑猥に動く。

俺がさせて置いてなんだが、貴族の織女とは思えない卑猥な格好と動きだ。

教室の片隅で激しい自慰をしている美少女に気を取られないで進められる授業は、中盤に差し掛かっていた。

「マントを外して俺の上に座れ」

「あつ……あう……」

首から上は絶頂の余韻で力無く俯いているが、俺の命令を受けた身体はキビキビと動いてマントを外す。

その間に俺もズボンを脱いでおき、モンモランシーの自慰を間近で見た興奮で反り立つ陰茎を開放する。

机から立ち上がって俺へ近付いてきたモンモランシーが、座り易い様に身体を引いて固定されている机と椅子の間に空間を作った。

スカートは自慰の最中にウエストの部分で捲り上げられているので、立っても愛液に塗れた股間は隠されない。

椅子と机が固定されている所為で少し入り辛そうにしながらも、モンモランシーが隙間に移動してくると、俺のすぐ目の前に尻がやって来た。

まさに目と鼻の先にあるモンモランシーの尻は小さくて形も大変良く、肌も綺麗なもの。

その綺麗な尻を揺らしながら何とか俺の膝の上に移動してきたモンモランシーの身体は、普通に椅子へ据わる様に腰を下ろしてくる。

下には当然俺の反り立つ陰茎が待ち受けており、尻が近付けば自然と濡れた大陰唇に鈴口が食い込んだ。

「ひぐっ！？」

自分の性器に得体の知れない熱くも固い感触を受けたモンモランシーは、絶頂の余韻から思考を引き戻され、悲鳴を漏らす。

そして、恐る恐る自由になる首で後ろに居る俺へ

振り向き、視線を降ろした。

「っ！？ いや！ それだけは駄目よ！！」

自分の尻の下に俺の裸の下半身があり、大陰唇に受けた感触で何が当たっているかを察知したモンモランシーが、ショーツを脱がせた時以上に拒否を示す。

しかし、モンモランシーの身体は一切止まる事無く俺の命令を実行していき、遂には亀頭が膣口へ減り込んだ。

「んぐっ！！」

処女の締め付けがあっても一度絶頂に達した事で適度に解れた膣口は、愛液の滑りが加わった所為で入り込もうとする亀頭の動きを拒絶できていない。

モンモランシーの身体が俺の膝の上に降ろされる速度は速くないので、じわじわと膣口を広げていく。

徐々に減り込んでいく亀頭から送られる膣口の拡張感は、モンモランシーに呻き声を上げさせた。

「ひぎうっ！！」

亀頭がぬるりと入り込む感覚は俺に快感として送られ、陰茎は更に硬くなってしまう。

変化としてはごく僅かであっても、狭い膣口を広げられているモンモランシーは敏感に感じ取る。

「んくあっ！　大きくっ！？　駄目！　裂けるう……っ！」

「大丈夫だって、赤ん坊はこれよりも太いんだからな」

「そ、そんなのは良いから！　止めさせて！」

「それじゃ、一気に腰を降ろしてみようか」

「い——」

そして、モンモランシーが短い拒絶の言葉を言い切る前に、降りて来ていた腰は俺の太股へ落とされた。

「あっ……………！」

亀頭だけが生暖かい大陰唇に挟まれ、膣口の締め付けを受けていたと思えば、一気に竿の根元付近までズルリと滑る感覚が広がり、膣壁に包み込まれる。

途中にあった筈の処女膜は呆気無く破り去られ、鈴口は子宮口を突き上げた。

モンモランシーは処女を失った上に、狭かった膣内を無理矢理広げられた衝撃で、頭を振り上げて軽く意識を飛ばす。

陰茎は根元まで入っていないのは、モンモランシーの身体が少女の域を超えていない証とも感じ取れる。



太股に辛うじて接触しているモンモランシーの若く弾力がある尻は、興奮を更に高める要因となった。

「あぐうっ！？」

飛ばしていた意識が戻ってくると、流石に衝撃が強過ぎてモンモランシーの自由にならない筈の身体が、意思を反映したように強張る。

広げられるだけだった膣壁は突然侵入して来た異物に混乱して強い締め付けを繰り返し、胎内の奥から膣口へヒダが波打って陰茎を押し出そうと蠢いた。

どれだけ拒否してもモンモランシーの身体が真上にあるので、膣壁の力だけでは陰茎は全く動か

ず、膣壁の抵抗は単に陰茎を強く締め付けて舐めるだけ終わる。

十分すぎる愛液に塗れたヒダが興奮で張った陰茎の表面をヌルヌルと蠢く感触は、俺の快感を高めるばかりだった。

「んぐう……く、苦しい……！」

モンモランシーが子宮口を突き上げられた感覚で呻く。

首から下は姿勢良く俺の膝の上に座っているが、首から上はぐったりとしていた。

陰茎を包み込んでいる膣壁も波打つ動きは小さく、締め付けばかり強いだけ。

精液を吐き出すには少し刺激が足りないと思った俺は、おもむろに手をモンモランシーの前へ持っていた。

「ひうっ！？　今度は何をする気なの！？」

「気持ち良い事だよ」

「もう十分でしょ！　止めさせてよ！」

「まだ、精液を出してないから駄目だよ」

「せ、せいえ.....、中に出す気！？」

「そうだけど？」

俺が過去にも当たり前にしてきた事を言えば、モンモランシーは肩越しに振り返りながら目を見

開いて驚く。

「嫌よ！ 止めて！ 今すぐ抜いてよ！」

「そんなに邪険にするなよ」

首から上で必死に抵抗を試みるモンモランシーを置いて、俺は曝け出されている胸へ手を持っていった。

そして、指を目一杯広げて鷲掴みにすると、全体を揉み解していく。

「んひう！？ や、止めて！」

平常な状態を触ってはいないが、心成しか弾力が強い気がした。

掌の中心には硬くなった乳首の感触があり、指を動かせば胸全体が動いて乳首すら形を変える。

「まだ、乳首が硬いな」

「んあっ！？ つ、摘まないで！」

確認するように親指と人差し指で摘むと、興奮で尖って敏感になった乳首は少し力を入れるだけでモンモランシーへ快感を送り、拒絶の言葉に快感が含まれた。

コリコリと乳首を捏ねれば、破瓜の衝撃で止まっていた愛液も早々に分泌を再開させ、拒否とは違

う動きで膣壁がうねる。

「んいうっ！ ひんっ！ だ、駄目よ！」

「上下に腰を動かすんだ」

「ひっ！？ 止めさせて！」

未だに諦め悪く哀願を繰り返しても、モンモランシーの身体は淡々と俺の命令を実行に移し、快感で震える腰を持ち上げた。

ヌルヌルの膣壁に扱かれる陰茎には大きな快感が追加され、精液の充填も早くなる。

張ったカリにもヒダが積極的に抵抗を示しては強く締め付けた。

既にカウパー液すら鈴口から漏れ、膣壁から滲み出る愛液を掻き出す代わりに陵辱の証を残す。

俺の太股から白く小さな尻が上がり、愛液に塗れた竿が膣内から出てくると、空気に触れて冷たい感覚が陰茎に感じられた。

「んぐう……！」

処女を失った直後の膣内をカリで引っ掛けられ、消えていく異物感で声を漏らすモンモランシー。

強い締め付けで陰茎が出て行けば、鈴口の先でヒダが即座に隙間を埋めた。

そして、カリが膣口を胎内から押される感覚を受けたモンモランシーの身体は、俺が何も言わなくても再び腰を降ろしていく。

「んふぁう……！」

モンモランシーが最初に感じていた痛みは既に無くなっており、乳首からの快感を呼び水にして、膣内の刺激をも快感として受け取る。

腰が降ろされれば、モンモランシーは膣内が広げられる刺激に甘い声を吐き出した。

「あふっ、ううん……………」

モンモランシーが意識から快感に染まった事で、身体の反応も陰茎を締め出そうとしていた膣壁



が陰茎の表面へ張り付き、強く圧迫を加えながらも奥へ引き込もうとしてくる。

ジワリと下がるモンモランシーの尻が俺の太股に接触すると腰の動きは止まり、鈴口は少し固い感触の子宮口を持ち上げた。

陰茎にはヒダが蠢きながら竿からカリの凹みまで隙間無く這い回り、積極的に絡み付いてくる。

指で弄っている乳首も心成しか固さを増し、摘み易くなっていた。

乳輪から指の腹を這わせて肌へ触れる程度の軽い刺激を送り、乳首の頂点へ到達するとスイッチを押すように正面から乳首ごと押し込む。

余った指で胸全体を揉み解し、モンモランシーの美乳を味わっていく。

「んあう……、ふっ、うう……、んんっ……」

モンモランシーはゆっくりと動く腰に合わせて嬌声を漏らし、緩やかだが確実に押し寄せてくる快感に浸る。

しかし、俺としてはその動きでは満足できず、次なる命令を出した。

「もっと早く腰を動かすんだ」

「あ、へっ！？」

「気持ち良くなるなら遠慮なく動け」

「っ！？ 駄目、ええ！」

モンモランシーは自慰をさせた時の激しすぎる、遠慮の無い絶頂が再び襲ってきそうな命令を聞いて、静止の言葉を言い放つも既に遅く、モンモランシーの身体は勢い良く上下に動き始める。

股間ではグチュグチュと愛液が掻き混ぜられる音が授業中の教室に響き、クラスメート全員の耳に入った。

それでも真面目に勉強を続ける生徒と教師は、視線すら寄越さない。

揉んでいる胸はモンモランシーが上下に動く所為で、手を重ねていても激しく揺れる。

そこそこ手からの快感を堪能した俺は、陰茎からの快感に集中しようと、モンモランシーの腰を掴んでピストン運動の補助をした。

「ひうっ！ あうっ！ んくあっ！！」

膣内をカリで削られ、子宮口を断続的に突き上げられる快感は、モンモランシーに嬌声を絶え間なく吐き出させる。

上下に身体が動けばつられて長い髪も踊ると、日の光を反射して飛び散る汗と合わさってキラキラと光り、幻想的とも言えそうな雰囲気を感じた。

モンモランシーの尻が俺の太股に当たっては反発を利用しては腰が上がり、再び重力に従って落ちてくる。

単純な上下運動でも互いの快感は急速に蓄えられ、思考は白く染められつつあった。

「うくっ！ あふあっ！ ああっ！」

「んっ、ふっ、はっ、はっ！」

一切動いていない俺も陰茎からの快感で自然と呼吸が荒くなる。

モンモランシーに至っては上下運動をしている所為で背中から熱気と、下半身から愛液の卑猥な匂いが漂ってきた。

激しく動く膣壁に陰茎を擦られる俺の快感は高まり、射精の気配が一気に近付く。

「うっ！　そろそろ、出すから、合図をしたら、根元まで入れて、くっ、腰を止めて下半身に力を入れるんだ！」

「ひうっ！？　駄目よ！　な、ああっ！　中で出

したら、んあっ！　子供が——」

「よ、し！　止めろ！」

「んあっ！　いやーっ！」

合図を聞いたモンモランシーの身体は腰を落として陰茎を根元まで咥え、命令通りに下半身へ力を入れて膣内を締め上げる。

絶頂の予感で震えていた陰茎に生暖かい膣壁が絡み付き、押し遣られたヒダが蠢きながら陰茎全体を擦ってきた。

鈴口は子宮口の固い感触に包まれ、カウパー液が子宮へ滲む。

「くっ！　出る！」

「んあっ！？」

そして、精液がモンモランシーの子宮口へ直接吹きかけられた。

「んふあっ！　出てる！　きうっ！　中で、ええ！！」

「うくう……」

胎内の最奥で精液が掛けられる感触を受けたモンモランシーが、悦を含んだ悲鳴を上げる。

しかし、身体は快感を溜め込んでいた所為で、射精を子宮口で受ける新しい刺激も快感として受

け取り、絶頂へと上った。

俺の太股にピッタリと降ろされたモンモランシーの白い尻は痙攣を繰り返し、秘裂は断続的に潮を噴き出す。

「ひんぐっ！ ひ、ひうっ！！」

「おう……」

身体が自由にならないモンモランシーは激しい絶頂の中で首だけを反らして天井を向き、快感で嬌声を上げ続けた。

陰茎は痙攣を繰り返しながら締め付ける膣壁を広げ、鈴口が減り込む子宮口へ精液を塗りたいくる。

尿道を駆け上がる体液の感覚は長く、膣内の最奥



に溜まった精液は愛液と共に締め付ける膣口から逆流してきた。

「ひっ！ ひうっ……！」

「うっ、くふう……」

ビクビクと痙攣する膣壁は徐々に動きを静め、陰茎も吐き出す精液と硬さが収まっていく。

モンモランシーは嫌々ながらも受けた大き過ぎる快感と、その伴う絶頂で朦朧としているらしく、俺から見える後頭部からも意識がハッキリしていない雰囲気を感じられた。

疲労と快感を重ねたモンモランシーの身体が、命令を全て実行した事で力が抜けてしまい、後ろへ居る俺に身体を預けてくる。

「うっ……、いうっ……………」

美少女の柔らかい身体と汗の匂い、髪から漂う香りは射精を終えた俺に優しい余韻を与えてきた。

僅かながらもモンモランシーに愛おしさを感じて、腕の中に居るモンモランシーの身体を抱き締める。

「もう……止めさせて。終わったでしょ？ 中に全部出したでしょ……？」

「ああ、そうだな。『終わったから、俺から立って机の横に行くんだ』」

「……………んくっ」

黙って立ち上がったモンモランシーは、膣内から陰茎が抜ける刺激で呻き声を出す。

捲り上げられたスカートから精液を逆流させている自分の股間が見え、悲しそうな表情を浮かべたモンモランシー。

「……………」

そして、モンモランシーは机と俺の間から身体を抜き、命令通りに隣の机との間に設けられている階段へ立つ。

表情は抵抗の意思を示しておらず、完全に諦めの

境地に達している様子だった。

これでは、この先犯すにしても楽しさは半減してしまう。

別に同情をした訳でもないが、モンモランシーの精神を守ってやる為に処理が必要だ。

「モンモランシー、『俺が手を叩いたら催眠状態になって俺以外の声が聞こえなくなるぞ』」

「.....まだ、何かやるの？」

「それじゃ、行くぞ」

モンモランシーの問い掛けに答えないまま、手を「パン」と叩く。

「……………」

無気力だった表情から意思すら抜けたモンモランシー。

捲られたスカートに、股間からは精液を垂れ流し、美乳すらブラウスを上半分だけ外すと言う卑猥な格好で露出していた。

意思を封じた人形状態では性欲が復活してしまいそうだが、余計な悪戯はしないで後始末に掛かる。

「モンモランシー、聞こえるか？」

「……ええ」

精神を手っ取り早く回復させるには、犯された記憶を消去するか、犯される事がたいした事の無いように感じさせるかだ。

犯された事を忘れさせるのは少し面白くは無いので、後者を選ぶ。

「俺に犯されても、それは世界の常識なので何も心配要らないぞ」

「.....でも」

「それこそ、初対面の相手に挨拶をする位に当たり前の事だ」

「.....当たり前」

「だから、モンモランシーが犯されたのは、俺から挨拶を受けたと同じだから、傷付く方が可笑しいぞ」

「.....挨拶を受けた」

犯された事を気にさせない為、光栄な事だ何だと余り賛美し過ぎると、俺に特別な態度を示してくるかもしれない。

そんな面倒なのは御免なので適度に気にさせず、ごく当たり前だと思わせる。

貴族であっても、平民から挨拶を受けた程度で傷付く者など余り居ないだろう。

少なくともモンモランシーは、それを無礼だと思いうタイプではない。

「後、俺が身体を触るのも挨拶代わりだから、恥ずかしがらずに気持ち良くもなれ」

「.....気持ち良くなる」

犯す事を気にさせないようにしても、身体を触られる事は別だろうから手を打っておく。

ついでに快感を拒否しない様にしておけば、万全だ。

「それじゃ、俺がもう一度手を叩けば、暗示に掛かったまま正気に戻るぞ」

「.....戻る」



再び俺が手を叩くとモンモランシーの目に光が戻り、無気力だった顔にも元の活発な雰囲気に戻る。

正気を取り戻してから、自由になった身体を改めて見下ろすモンモランシーは呆れた表情に変わった。

「.....あんた、出し過ぎよ」

「モンモランシーの中が気持ち良くてな」

「気持ち良くてな、じゃ無いわよ。.....とりあえず綺麗にしないと」

言い訳にもならない俺の言葉に呆れるモンモランシーは、杖を取り出して魔法で水を作り出す。

それを汚れた股間へ持って行き、精液と愛液に濡れる大陰唇と秘裂の中、そして膣口付近と洗い、太股から尻に流れていた愛液も流した。

空中に浮かぶ水玉と言う重力を無視した分かり易い魔法に、俺の好奇心は刺激されて止まない。

それでも、汚れを流す為に股間を包む水の中に出て来た水流で、形を変えられる大陰唇と小陰唇の動きを見てしまい、受ける興奮の方が大きかったが……。

「……よし、これで良いわね」

股間に感じていた不快感が消えたモンモランシーは満足そうに頷いた。

太股の半ばで引っ掛かっていたストッキングと  
ショーツを上げ、ウエストに挟まれていたスカート  
も戻すと、埃を落とす様に尻とスカートの前を  
軽く叩く。

「もう、犯すのは良いんでしょ？」

「ああ、もう満足したしな」

「全く……、次からはちゃんと時間を選んで犯し  
て欲しいわね」

「すまんすまん」

マントを付けながら文句を言ってくるモンモラ  
ンシーも、言っている内容を可笑しいとは思って  
いない。

普通の貴族の淑女なら処女を大切にしてい何があっても守るものだが、暗示の効果もあって平然と犯される事を受け入れていた。

「さてと……」

俺からの用が終わったモンモランシーは自分の座っていた場所へ戻り、いざ授業を受けようとした途端に外から鐘の音が聞こえてくる。

「えっ！？」

「はい。今日の授業はこれで終わりです」

「へっ！？」

咂然として授業の終わりを知らせる教師を見る  
モンモランシー。

肝心の教師は珍しく授業に集中していた生徒達  
に満足した笑顔を浮かべている。

そして、モンモランシーは俺の方をバツと振り向  
いた。

「ちょっと！ あんたが犯してくるから授業終  
わっちゃったじゃないの！」

「モンモランシーの頭は悪くないんだから、別に  
一回ぐらい授業受けなくても問題ないだろ？」

「そ、そうだけど……」

モンモランシーの成績は悪くないどころか、優秀と言っても良い位だ。

何せ普段から魔法薬を作っているので、知識の量と薬を作る経験が普通の生徒よりも圧倒的に多い。

実家の爵位が降格されたので仕送りも期待できず、何気に生活が掛かっているので当然と言えば当然だ。

「困ったら俺が何とかするから気にするなよ」

「平民のあんたに何が出来るのよ」

胸を張って断言して見るが、モンモランシーは胡散臭げに溜息を付いた。

「はあ……、まあ、良いわ。本当に、犯す時は場所と時間を選んで頂戴」

「分かった」

「まったく、仕方が無いわね……」

そう言ったモンモランシーは出していた教材を片付け、サッサと教室を出て行ってしまった。

残された俺の所には、いつものようにキュルケに絡まれるルイズが近付く。

「ダーリン。浮気？」

「違うよ。隣に座ってたから挨拶をしたただけだ」

「にしては、随分中が良さそうだったじゃない？」

「あら、ヴァリエールらしく、やきもちかしら？」

「なっ！？　違うわよ！　こいつは私の使い魔なんだから、対人関係も管理しないといけないでしょ！」

「あ～、はいはい。そうね」

「ツェルプストー！」

さも、恋人がするやきもちを焼いたと思われたルイズは、顔を真っ赤にしながらキュルケへ反論を飛ばす。

しかし、肝心のキュルケは相手にしておらず、適



当に流していた。

姦しい騒ぎに周りの生徒達も、いつもの事だと、たいして反応を返さないで教室から出て行く。

残された俺とルイズにキュルケは、結局いつも通りの遣り取りで次の授業へ行くのだった。

## コ○ドギアス編その1

枯れ木に花を咲かせましょう、ってな具合で通風孔から艦全体へ洗脳効果のある粒子をばら撒いて早数日。

隅々まで行き渡った異世界の食べる事が出来る粒子、と言うか、調味料は黒の騎士団全員を汚染し、今では俺の楽園とも言える状態になっていた。

当然ながら、俺は事前に解毒作用のある物を食べているので効果の範囲外に居る。

俺がコツコツと足音を立てながら見学しているのは、黒の騎士団が手に入れた空中要塞＜斑鳩＞だ。

巨大な艦は数日歩き回っても新しい発見があり、大きな乗り物にロマンを感じる俺には歩いているだけでも楽しい。

それに引き換え、ルルーシュは黒の騎士団として、捉えられていた解放戦線の英雄を奪還したり、敵意を見せながらも終始微妙な表情を浮かべるコーネリアと戦ったり、挙句にはナナリーが攫われて取り乱したり。

色々大変な事になっていたようだが、俺は結局全てのイベントを外から観察し、もしくは又聞きする程度で関わっていない。

ちなみに、原作ではルルーシュとコーネリアが直接戦う前に、ユーフェミアの特区を造ろうとするイベントがあるものの、それは阻止しておいた。

前以て、特区を造る為に意見を聞きたいと、何故かユーフェミアから手紙が俺に届き、相談を受けたのだ。

いわく『どうすれば日本人達に賛同を受けられるのか』と。

しかし、このイベントが起こってしまえば、ユーフェミアはルルーシュの暴走したギアスが原因で結果的に死んでしまう。

せっかくの美少女をむざむざ死へ追いやるのは、俺が持っている『ヒロイン級の美少女を失うのは勿体無い』との仁義に反するので、特区の設立には反対しておいた。

当然ユーフェミアは『何故？』と返信を送ってくるが、流石に原作の情報を教える訳にはいかない。

説得するのも面倒なので、諦める様にサクッと洗脳した。

異世界産のクッキーを使って。

サクサクの歯応え最高！

この様な出来事があったお陰でユーフェミアの特区イベントは消え、原作で言う『R 2』のストーリーに入っても、ユーフェミアは元気に生活している。

ナナリーは結局攫われたまま、ブリタニア皇帝シャルルに記憶を改ざんされた新しいルルーシュと、新しい弟として来た何か変なのとで、新しい学園生活が始まった、が、しかし――

C.C.と黒の騎士団の尽力によって、ルルーシュは記憶をアッサリ取り戻した。

俺もそのタイミングを見計らってルルーシュと

接触し、黒の騎士団の客として、今歩いている斑鳩に乗せて貰ったのだ。

「あっ！　おい、お前」

「んっ？」

「丁度良い所に居たな」

「何だ C.C.か.....」

「何だとはご挨拶だな」

後ろから声を掛けてきたのは C.C.。

黒いチャイナ服の様な衣装で、腰から入っているスリットは左右だけではなく前後にもある。

殆ど下半身を隠す役目は果たしていないが、ショートパンツを履いているので股間辺りはシッカリと守られていた。

服を大きく持ち上げる胸にはギアスを象徴するマークが刻まれ、歩く度に微かに揺れる。

ルルーシュにギアスを与えた張本人で、新参の黒の騎士団内部では、何で斑鳩に居るのか分からない立ち位置に居る人物。

「小腹が減ったから、アレを出せ」

「おお、良いぞ」

C.C.が言ったのは当然ながら、異世界産の食べ物。

ルルーシュが捕まってしまった時に俺の能力が知られてしまい、それ以来事あるごとにピザっぽい食べ物を要求されている。

俺も丁度欲求が溜まっていた所であるし、断る理由も無いのでズボンを脱いで陰茎を取り出した。

「ほれ」

「いつ見ても、美味そうだな」

「そうだろ？」

ギアスが効かない C.C.であっても異世界の力までは抵抗できず、陰茎から出る精液をピザと同等の好物と誤認させられている。

急に声を掛けられたので陰茎はまだ力が抜けている状態だが、C.C.は正面から平然と手で握ってきた。

「ほら、早く硬くしろ」

「お、おう……！」

急かしながら手を前後に動かし、陰茎へ刺激を送っていく。

細く長い指が竿に絡み、前後に動く指と独立した動きを見せる小指は、カリの凹みを爪の先で軽く引っ搔いてくる。

若干冷たいと感じる C.C.の手の感触で、俺の陰茎を見る間に固くなった。



「ふむ、これで良いな」

「ああ、準備は出来たぞ」

「私の準備も終わってる。早くしろ」

反り立つ陰茎へ満足そうな視線を送りながら張った亀頭を指先で撫でた C.C.は、そそくさと壁に手を付いて足を肩幅に開くと尻を突き出してくる。

腰の後ろから走っていたスリットは突き出された尻で広げられ、小さいが形の良い尻を包むショートパンツが出てきた。

事前に、陰茎を握ると愛液を流してしまう暗示を掛けているお陰で、既にショートパンツのクロッチは色が変わる程に愛液が染み込み、生地の上に

まで漏れ出ている。

「ほら、早くしろ」

「分かったよ」

突き出した尻をクイッと上下に揺らし、急かす C.C.の尻を両手で掴むと指が肉に沈む。

弾力が良く、流石に胸よりは硬いが、それでも十分に興奮を誘った。

何度か揉んでから、手を C.C.の腹側へ回してショートパンツを脱がしに掛かる。

ホックとファスナーを降ろせば、細いウエストは何の苦労も無くショートパンツを逃がした。

「.....随分色っぽいな」

「そうか？ これぐらい普通だろ？」

出てきたショーツは黒く、生地はさして高級感がある物ではないが、尻を隠す布の面積が小さい。

尻の上半分を丸出しにして谷間が完全に出てしまい、下側は下側で尻の谷間への食い込みが激しかった。

いわゆるローレグタイプのショーツ。

大陰唇を包むクロッチも愛液で色が変わり、秘裂すら確認できる程にピッタリと性器全体に張り付いている。

普通に脱がしては卑猥なショーツの意味も無い

と感じた俺は、クロッチを横へ捲り上げて大陰唇だけを剥き出しにした。

「んっ……早くやれ。好い加減我慢も出来ないぞ」

「分かったって」

言われるままに C.C.の手によって硬くなった陰茎を支え、剥き出しにした無毛の秘裂に鈴口を食い込ませる。

乾いていた亀頭に C.C.の愛液が付着し、ヌルヌルとした感触を受けた。

亀頭を食い込ませたままで俺が腰を突き入れれば、大陰唇が左右に押し遣られ、徐々に膣内へ姿を消していった。

「んああ……良いぞ。腹が満たされる」

「おふぁ……、いつ犯しても気持ち良いな」

横へ退けたショーツが大陰唇を中央へ寄せる所為で、陰茎に感じる生暖かく柔らかい感触がいつもより強い。

竿の形に広げられた秘裂は漏れ出していた愛液を陰茎に塗り付け、スムーズに飲み込んでいく。

隙間が無かった膣内を亀頭で広げながら奥へ行く程に、ヌルヌルになったヒダで擦られる陰茎からの快感が増幅させられる。

俺の下腹部が C.C.の尻へ当たって腰が止まると、鈴口には子宮口の感触を受けた。

「ふぁ……」

「んくっ」

膣内を陰茎に占領された C.C.が満足そうな吐息を吐き、壁を見詰めていた頭をゆっくりと上げる。

十分に準備をしていた膣内はヒダを陰茎に絡めると、手で握るようにギュッと締め付けを強めてきた。

不規則に波打つ膣壁が膣口から子宮口に向かって蠢き、呼吸する為に動く横隔膜の動きを受けて陰茎を上下に擦る。

腰を C.C.の尻に密着させているだけで扱かれている感覚を受けるが、やはりこれだけでは物足り

ない。

「.....おい、そろそろ動け」

「分かってるって」

不満だったのは C.C.も同じらしく、俺へ振り返ると動きを催促してきた。

言われるままに俺が腰を引けば、C.C.も視線を壁へ戻して悦しか含んでいない声を漏らす。

「んふあ.....」

ショーツの圧迫を受ける大陰唇が竿の形へピッタリと張り付いている所為で、外へ引っ張られる膣口が見えなくなっていた。

それでも秘裂から出てくる陰茎の姿は卑猥で、大陰唇に挟まれている感覚も強い。

胎内から出てくるカリが膣口に近付けば、掻き出される愛液の量も多くなり、ショーツに染み込まなかった分がショーツパンツの上に落ちた。

亀頭が出る寸前まで来ると秘裂も内側から捲られてしまい、ショーツに押されている大陰唇も左右へ広げる。

「ああ……」

再び腰を押し入れた後は、本格的にピストン運動



を開始して C.C.を犯していく。

「あっ、あうっ、んっ、うっ——」

陰茎を最奥まで入れられた C.C.は横隔膜を胎内から刺激され、挿入の間隔に合わせて声を漏らす。

パンパンと乾いた肌がぶつかる音と、愛液を掻き混ぜる卑猥な音が斑鳩の廊下に響いた。

陰茎に絡み付くヒダは興奮を溜めて充血し、厚みを増して更にカリへの抵抗を増やしてくる。

「ああ……うっ、くっ、広がる……っ！」

「ふっ、はっ、はっ」

俺が腰を動かせば、C.C.は膣内から受ける拡張感に満足そうな声を漏らした。

最奥を突き上げる度に、俺の下腹部へ当たる C.C.の尻が硬めに波打ち、胎内では鈴口から滲み出たカウパー液が子宮口へ付着する。

膣壁に舐められる快感で亀頭の力は張りを増し、膣内を広げれば反発するように締め付けを強めてきた。

C.C.の細い腰を抱えた俺は沸きあがる射精の予感に従い、本能のままに腰の動きを早める。

「うっ、はっ、あっ、あっ、うっ！」

「くっ、うっ、ふっ！」

腰を激しく打ち付けられる C.C.の喘ぎ声も間を置かずに早くなり、陰茎を咥え込む膣内が快感で痙攣を始める。

カリに掻き出される愛液は更に量を増して肌同士がぶつかる度に飛び散り、股間周辺どころか廊下の床にまで小さな水溜りを作っていた。

「あっ、あうっ、そ、そろそろ、出、そうか？ あっ！」

「あっ、ああ、で、出そうだ。くっ！」

「やっ、あっ、やっど、かつ、ふぁ！」

俺は腰を斜め下から打ち付け、子宮口を力強く押し上げる。

C.C.も近付いてきた絶頂で身体と足を振るわせ、壁に付いていた手も握り締めた。

目の前で揺れる緑の髪から漂う良い香りを嗅いだ俺は、子を孕ませたい本能で腰を激しく動かして射精へ向かう。

「はっ、ふっ、うっ！ 出る！」

「あっ、ああっ！ 早く、うっ、出せ、っ！！」

快感が溜まった C.C.は震える尻を、俺が打ち付けるタイミングを見計らって上下に揺らす。

C.C.の腰が動けば陰茎が削る膣壁も角度が変わ

り、膣内を突く刺激に大きな変化をもたらした。

「うおっ！」

「うっ、ほ、ほらほら、あっ、早くだ、出せ！」

湧き上がってくる射精の予感を我慢していた陰茎には C.C.の尻の動きが止めとなってしまう、俺の意思を通り越して暴発してしまう。

男の維持として C.C.の子宮口を思い切り突き上げると、精液を止めていた股間の力を抜いた。

「くはっ！！ 出る！！」

「ひくっ！」

塞き止めていた力が抜けた陰茎は大きく痙攣を始め、膣内の最奥で精液を放つ。

「ああ……！ 腹が、熱い……！」

「くふう……！」

ビクビクと断続的に吐き出される精液は、減り込む鈴口が子宮口を子宮内部へも確実に精液を押し込んでいく。

精液を受けた感触で C.C.も絶頂へ達して秘裂から潮を噴き出し、床どころか廊下の壁すら濡らした。

震えさせていた尻を激しく痙攣させ、全身も硬直してしまう。

「んっ！！　んんっ！！！」

「くっ！　締め付けが……！」

強く締め付ける膣壁で陰茎の痙攣はある程度止められてしまうも、精液だけは繰り返し吐き出していく。

絶頂に達した C.C.の膣壁は子宮口へ精液を送るように波打ち、奥へと引かれるヒダは亀頭を舐める。

まるで睾丸から直接精液を子宮口へ吸い出されるにも似た感覚は、射精の勢いと俺が受ける快感を大きくさせた。

「うっ……くふう……」

「ああ……、腹が満たされる……！」

暫く精液を吐き出し続けると陰茎も痙攣を落ち着かせながら射精も終わらせ、後には心地良い余韻がやってくる。

同じく絶頂を過ぎて締め付けを弱めた膣壁に包まれる力の抜けた陰茎は、ゆるゆると握り締められる感覚を受けた。

「うっ、ふう……、流石、ルルーシュが言うだけの事はあるな……」



「そりゃ、どうも」

胎内に増えた熱い体液の感触で、まさしく満たされた表情を浮かべて満足気に溜息を吐く C.C.。

突き出していた尻も戻して壁から手を離した。

C.C.が体勢を整えれば陰茎も抜けてしまい、横へ退けたショーツに押し遣られて、肉厚になった大陰唇の間から精液が垂れてくる。

「うむ、少しは腹が満たされたぞ」

「ふう……、俺の都合が良ければ幾らでも出してやるからな」

「ふふん、当たり前だ」

精液が流れる股間を満足そうに見詰める C.C.は、子宮辺りを少し撫でてニヤリと笑う。

ピザを食べ終わって口元を拭く様に、愛液と精液に濡れた股間周辺を拭き取り、降ろしていたショートパンツも履いた。

「さて、腹も満たしたし、私もやる事があるからな。もう行くぞ」

「ああ、まあ、仕事頑張ってくれよ」

「.....私が本当に仕事を頑張ると思うのか？」

「思わない」

「ふっ、分かってるじゃないか」

何やらニートみたいな事を言った C.C.は、体液に濡れて股間の色が変わっているショートパンツを隠さないままで去っていく。

残された俺も斑鳩の見学を続ける為に、放り出されていた陰茎を綺麗に拭いて身形を整えた。

「う～ん、次はナイトメアフレームでも見てみるか.....」

あわよくば、カレンのパイロットスーツが見れるかもしれない。

性欲は発散したばかりだが、少し休憩を挟んでから行くので多少は回復しているだろう。

駄目なら異世界の食べ物を出せば良いし、そもそもカレンの身体は魅力的だ。

弄れば嫌でも性欲は湧き上がる筈。

転生した思春期真っ只中の身体は、どれだけ女を犯しても犯し足りない。

△

そんな訳で、斑鳩内にある食堂で少し休憩した後、ナイトメアフレームが保管されている場所にやって来た。

前世では人型ロボットの兵器は現実味が無く、まさにフィクションの世界だったが、実際にロボットを目の前にすると血が騒ぐのは男としてのロマンを感じるからか。

人の何倍もある大きなロボットは見上げているだけで心が躍る。

「あれ？ あんた、こんな所で何してるのよ？」

「おお、カレンか」

ナイトメアフレームに感激していると声を掛けられたので振り返れば、そこにはカレンの姿。

しかも、スキューバダイビング等で着るウェットスーツに似たパイロットスーツを着ており、魅力ある身体の線がハッキリと浮かび上がっている。

身体前面の中央に黒のファスナーの線が首元から、大陰唇で盛り上がる股間まで続いている所為で、自然と俺の視線はカレンの首から股間まで辿ってしまう。

胸の辺りには丈の短いシャツ状のプロテクターみたいなのを着けているが、今は休憩中なのか首もとのボタンは外され、下のパイロットスーツのファスナーごと開かれていた。

巨乳が上半分まで見えているので、谷間も大胆に露出している格好であるものの、カレンはリラックスしている様子。

「カレンか、じゃないわよ。あんた、一般人でしょ？　ここに居たら危ないわよ？」

「ああ、ちょっと、ゼロのコネでね。斑鳩を見学させて貰ってるんだよ」

「私達は必死に戦ってるってのに、暢気ねえ……」

何気ない会話をする間にも、俺の手はパイロットスーツを大きく持ち上げるカレンの胸へと重なる。

「んっ、でも、格納庫なんて見ても、つまんないんじゃないの？」

「いや、ロボットは男のロマンだろ」

「何それ？」

カレンが着ているパイロットスーツはカレンの髪と同じ色で赤く、実際に触ってみれば見た目通りに硬い布の感触を受けた。

幾ら下に巨乳があっても、先にパイロットスーツの硬さが目立ってしまい気持ち良くない。

胸を揉まれるカレンは何事も無いように世間話を続け、学園では見せない素の表情を俺へ向ける。

スーツの上からでは満足できない俺は、開かれているファスナーの間から胸の谷間へ手を入れて、直接カレンの巨乳を揉み解した。

「んうっ、こっちはロマンとか、うっ、言ってもらえないわよ」

「ふ～ん、まあ、日本を開放するって言うのも大変だと思うけどなあ」



「そんな、ふっ、他人事みたいに……」

きついスーツの中では胸も押し込められているらしく、進入させた手は柔らかな胸の上であっても動かすににくい。

余り揉めないのも詰まらないので、俺は両手の指をカレンの左右の胸と脇の間に差し込み、胸の付け根に沿って手を下ろしていく。

手首でパイロットスーツを脱がしつつ、手が下乳に差し掛かると、手を引き上げて一気に胸を掘り出した。

カレンの巨乳は引き上げられた反動でたぷんと大きく揺れ、綺麗な乳首が乗った美乳が、人通りの激しい格納庫で取り出される。



「ひうっ！ .....おほん、えっとね——」

「ふむふむ.....」

騎士団でナイトメアフレームを動かす苦勞を話すカレンは、性的な行為を認識できなくさせられているが、流石に格納庫で胸を露出させられては短い悲鳴を出してしまった。

しかし、息を整えた後も顔色はたいして変えず、普通の態度で苦勞話を続ける。

カレンはブラを付けていないが、左右からパイロットスーツに押された胸は中央へ寄せられ、互いに押し合う胸が谷間を深くさせた。

乳首は真正面に居る俺へ突き付けられる。

下乳を持ち上げて、巨乳の重さと指に受ける柔ら

かな感触は、C.C.で発散した俺の性欲を回復させていく。

頂点にある乳首は相変わらず綺麗なピンクで麗しく、揉まれた所為で少し興奮を溜め込んだのか、平常時よりも僅かに尖る。

産毛を撫でる程度の力で巨乳の肌へ指を這わせると、カレンの胸は鳥肌を立て、つられた乳首も固さを増していく。

目の前で放り出された胸が変化していく様子は卑猥極まりなく、半立ちだった俺の陰茎も即座に反り立った。

「ふぁ……んっ、やっぱり、うっ、ゼロの、戦略は間違い、んあっ、無いわよね」

「へえ、そうなのか」

乳輪の縁に指を這わせ、決して胸の形を変えない力加減で刺激していくと、カレンの言葉には嬌声が混じる。

ピンクだった乳首は胸を触られた刺激で赤みを増し、明らかに興奮を溜め込んでいた。

尖った乳首をキュッと摘めば、カレンは嬌声と共に身体をピクンと跳ねさせる。

「んあっ！」

「どうした？」

「ひんっ！ な、何でもないわよ？ うっ！」

「そうか」

乳首を捏ねる俺の指と連動して声を上げるカレンは、自分が上げる嬌声にすら気が付かない。

しかし、カレンの顔は緩やかな快感で頬を赤くさせ、快感で目が若干トロンとしてきた。

掌を広げた俺は尖った乳首ごと覆い隠すように真正面から巨乳を握り、軽く揉んでいく。

「んくっ、あっ、や、やっぱり、いう、良いわよね」

「何がだよ？」

「じ、くっ、自分で日本を取り戻しているって、ふっ、実感できるの、っ、て」

性的な刺激を受けたカレンの巨乳は張り、パイロットスーツの中で触った時よりも揉み応えがあった。

賢者タイムであっても揉み続けていたいが、そろそろ陰茎が開放を望んでくる。

名残惜しくも巨乳から手を離した俺は、パイロットスーツのファスナーを摘むと股間まで一気に下ろした。

「ひっ！？」

「でも、命の危険があるから危ないんじゃないか？」

「そ、それでも、遣り甲斐もあるし——」

露になった腹は鍛えられた筋肉が僅かに浮かび上がり、下腹部では汗に蒸れた陰毛が肌に張り付く。

限界まで下げたファスナーの影に見える秘裂の端では、既に淫核が包皮から出ており、股間の部分から愛液の濃い匂いが漂ってきた。

俺は適当に話を合わせつつ、手をカレンの股間へ差し込む。

「ひぐっ！？」

性器に男の手を感じたカレンは、身体をピンと伸ばして反射的に悲鳴を漏らした。

進入させた俺の指には愛液に濡れる大陰唇の感

触があり、僅かに開いている秘裂へ指先を差し込めば、ヌルリと膣口に吸い付かれる。

処女は学園に居る時に失ったカレンでも、久しぶりに受ける膣口へ進入される刺激には敏感な反応を返した。

背中を反射的に反らせた所為で曝け出されていた胸は縦に大きく揺れ、対照的に俺へ突き出された股間は指を深く食い込ませる。

膣口に俺の指を入れられても、カレンは何とか普通に会話が続けようとするが、淫核を刺激された途端に嬌声に取って代わられた。

「だ、だから、ひうんっ！？」



もはや快感で蕩けた視線は俺を見ておらず、身体からも力が抜けてしまっているカレン。

俺が膣口に食い込ませた指を出し入れすれば、カレンは腰を小さく前後に揺らして快感に身体を反応させ、淫核を親指で弾けば、背中を反らせたままで全身を跳ねさせた。

愛液は既にパイロットスーツの中で溜まっており、耳を澄ませばカレンの足元からニチャツと滑る音が聞こえる。

目の前で俺の指によって引き出されるカレンの痴態を見てしまつては、陰茎も我慢の限界とズボンの中で自己主張を強めてきた。

張った所為で陰茎からの痛みも発してきたので、サッとズボンを脱ぐと、カレンが着ているパイロットスーツを勢い良く脱がせる事にする。

ファスナーが開かれていた首もとの生地を持っ

てカレンの肩を出させると、そのまま太股の半ばまで引き降ろした。

「んあっ！？」

脱がされた反動で再び巨乳は揺れるも、カレンは快感で表情を惚けさせたまま抵抗を示さない。

意識自体は普通に会話をしていると認識している筈だが、快感に染まる身体に思考が引っ張られてしまい、既に正常な判断力は失われている。

下着を何も付けていないカレンはパイロットスーツを脱がされてしまえば、殆ど全裸になってしまう。

脱がせる為に屈んだ俺の眼の前では鍛えられた腹筋に愛液で湿った陰毛、その下には愛液を漏ら

して僅かに秘裂を開く大陰唇が至近距離で観察できる。

顔を上へ向ければ、左右に広がって前へ突き出ている巨乳の下乳が見え、その谷間からカレンの顔が覗いていた。

俺から見えないカレンの後ろは意外に華奢な背中、引き締まった腰から肉付きの良い尻まで、人通りの激しい格納庫で曝け出された。

パイロットスーツは膝の辺りで辛うじて引っ掛かっているものの、身体を隠す役割は一切果たせていない。

周りを行き来する団員達も見えてはいるが、俺の行為を気にしない様にさせているので、顔を赤くさせながらも注目する事無く、視線を反らして自分に与えられた作業を続けた。

立ち上がった俺は正面からカレンの尻を掴んで愛液に濡れる股間を前へ突き出させると、陰茎を

股へ進入させて素又の体勢へ移行させる。

掴んだカレンの尻は C.C.の尻よりも鍛えられているらしく、強めの弾力を指に返してきた。

「んあうっ……！？」

大陰唇に新しい熱さと硬さを感じたカレンは、快感に蕩けた思考のままで声を漏らす。

「……それで、ゼロの指揮はやっぱり凄いのか？」

「んあ……？ えっ！ ええ、んくっ、そ、そうよ」

意識を朦朧とさせたままで犯しても余り面白くないと思った俺は、カレンに話しかける事で意識をハッキリさせる。

世間話の続きをしながらも、反り立つ陰茎が愛液に濡れたカレンの大陰唇をヌルリと割り開き、竿が秘裂の中へ入り込む。

そのまま俺が前後に腰を動かせば、陰茎に愛液が塗りたくられていく。

「んふぁっ……、ぜ、ゼロの、うっ、作戦はいつも、んっ、的確で——」

カレンの身体に快感を送る動きを繰り返せば、愛液が十分に陰茎へ移ってきた。

ヌルヌルの感触を受けた俺はそろそろ入れようと、腰を少し引いてから軽く落とす。

陰茎の角度が斜めに変わった所為で、鈴口が大陰唇を左右へ押し遣って膣口に食い込んだ。

そして、俺は腰を突き上げて、久しぶりにカレンの膣内へ陰茎を挿入して行く。

「ん、くああ……」

「うっ……」

亀頭を包む大陰唇の柔らかな感触から膣口の締め付けを通り、興奮を溜め込んだ膣壁の熱さが亀頭を迎え入れてくれた。

当然ながら処女膜が無いので挿入は容易く、カレンの尻を俺へ引き寄せるだけで陰茎は根元まで入っていく。

「んああ……」

「うくっ……！」

陰茎が膣内に入るにつれてカレンの身体が持ち上げられ、遂には足を床から離してしまった。

後ろへ倒れない様に俺の肩を反射的に掴んだカレンは、更に膝を上げると俺の腰を挟んで体勢を固定してきた。

しかし、カレンの足は膝の下でパイロットスーツに拘束されているので、俺の腰へ絡まる事は無く、少し変形した駅弁の体位になる。

陰茎から最奥を突き上げる感覚を受けたと思えば、カレンは身体を奥から押されて吐息を出した。

「くはっ！ .....ああ、く、黒の騎士団のっ、ふっ！？ だ、団員として——」

「おう.....」

カレンは足を床から離してしまった所為で完全に俺へ身体を預けてしまい、自然と子宮口にカレン自身の体重が掛かる。

互いに抱き締め合う体勢ではカレンの巨乳が俺の胸板で潰れてしまい、柔らかい胸の肉が開いている上へ逃げてきた。



「よっと……」

「がん、んあっ！　頑張って、ひあう！！」

抱えたカレンの身体を腕と腰の力を使って動かし、ピストン運動を開始する。

上下に動く反動で互いの身体の間で潰されていた巨乳が揺れ、俺の顔のすぐ下で性的な興奮を溜めて赤みを増した白い胸がたぷんたぷんと波打った。

陰茎を咥え込む膣内は、ヒダを蠢かせて亀頭と竿を隙間無く舐め回す。

不自然な体勢を維持する為にカレンはいつも以上に腹筋へ力を入れており、自然と膣内の締め付けも強まる。

俺が身体を動かせば動かす程に、犯される膣内からの漏れ出る愛液は増えていく。

ヌルヌルの感触は股間周辺に広がり、ピストン運動が更に遣り易くなった。

「うっ！　ね、ねえ、ふぁっ！　聞ってる、の、お？」

「ふっ、はっ、ああ、き、聞ってるよ」

「そ、んっ！　そう、あうっ、で、でね——」

激しく身体を揺さぶられ、犯されても、カレンは認識出来ない性的な行為に囚われず会話を続ける。

それでも膣内は陰茎を締め付けながらもヒダを

絡み付かせ、亀頭の形に沿って膣壁の形を変えた。

カレンの尻は抱える為に掴んだ俺の手で左右に広げられて肛門すら格納庫で晒すが、広げられる力に対抗してキュッと括約筋が締まる感触を指先に受ける。

本当なら久しぶりのカレンの身体をじっくり味わいたいと思うも、俺の腕には長時間他人を抱えて動かせる腕力は無い。

両手が使えない状態では異世界の食べ物でドーピングも出来ないので、俺は早々にスパートを掛けた。

「ふっ！？　うあっ！　ぐ、紅蓮が、あっ！」

「ふっ、はっ、くふっ！」

早くなった動きで不安定になった体勢を何とか維持しようとするカレンは、俺の肩を掴んでいる手と腰を挟んでいる足へ無意識に力を入れる。

自然と締め付けが強くなった膣内は絶頂の予感で痙攣を始めるが、先に射精をしてしまいそうな程にヒダの蠢く快感が大きい。

股間に力を入れながら精液を止めつつ、腰を引くと同時にカレンの尻を離させ、突き入れると同じタイミングで手を引いてカレンの股間へ下腹部を打ち付ける。

「あっ！　うっ！　ふうっ！！」

「ふっ、はっ、はっ！」

子宮口を勢い良く打ち付けられるカレンは既に話を続けるだけの余裕は無くなり、嬌声を激しく吐き出す。

身体を揺さぶられても俺へ向けられていたカレンの顔は汗を滲ませながら徐々に上を向き、視線が他の場所へ向けられた。

頭がガクガクと揺れる所為で半開きの口からは唾液が僅かに飛び散り、顎の下でむにむにと形を変える巨乳へ落ちる。

カレンの尻を力強く握り締めた俺は尿道へ精液が上がってきた感覚を受け、疲労を重ねる腕に最後の力を入れた。

「いっ！ あっ！ ひあっ！」

「くっ、うっ、はっ！」

先に限界を迎えてしまった俺は握っていた尻を思い切り引き寄せると、鈴口を子宮口に接触させて股間から力を抜く。

「くふっ！ 出るっ！」

「んふぁっ！？」

塞き止められていた力が抜けた尿道を、精液が塊となって断続的に子宮口へ流れ出て行く。

膣内の最奥で熱い体液を受けたカレンも、首を跳ね上げて天井の向こうへ視線を送り、俺の肩を掴んでいた手を強く握り締めた。

「ひううっ！！？」

「くう……っ！」

精液を子宮口で受けたカレンは硬直して汗を飛ばし、全身が強張った所為で下半身へも力が入る。

それでも、痙攣を繰り返しながら精液を流し込んでいく陰茎の動きは止められない。

「うっ……んあ……」

「ううっ、ふっ……」

断続的に跳ねながら子宮口を擦る鈴口は全ての

精液を出し切り、亀頭には膣内で体液溜りに浸る感触を受けた。

硬直していたカレンの身体は徐々に力が抜けていき、床から離れていた足がソッと落ちると、カッンと金属を叩く音を立てて着地する。

股間を密着させたままで抱き合う体勢になった俺とカレン。

「あっ……んふぁ……わ、私に紅蓮を任せてくれた、んくあっ、ゼロにはか、感謝してるのよ」

「ふう……そうなのか」

絶頂に達しなかったカレンは、射精を受けたショックと快感から戻って来た途端にゼロの話題を再開させた。



天井の向こうへ行っていた視線を俺に戻しても、表情は性的な快感で蕩けており、その表情は射精直後で無ければ見ているだけで興奮を誘うだろう。

性欲を満足させた俺はカレンの尻から手を離して、力の抜けた陰茎を抜いた。

「んふあっ……！」

絶頂に届かなかった所為で性欲が発散できなかったカレンは、陰茎が膣内を出て行く感覚で甘い声を出す。

身体を離すと俺の肩を強く握っていたカレンの手も離れ、力無く腰の横へ戻る。

膣口から亀頭が抜け、膣内を占領していた異物が抜けてしまうと、子宮口付近に溜まっていた精液が重力に従って逆流してきた。

たばたばとカレンの足に絡まっていたパイロットスーツのクロッチの部分へ精液は落ち、生地に染み込まないままで足首へと流れる。

粘度の高い体液が脚を流れる感覚は気持ち悪い筈だが、カレンは一切気にしないで心成しか足元をフラフラさせながらパイロットスーツを膝から上げた。

気だるそうに袖へ腕を通して肩へ伸ばし、股間からファスナーを締める。

流れ出した愛液と精液を拭いていないものの、格納庫に来た俺へ声を掛けた時の格好になった。

相変わらず胸元を大きく広げて谷間を見せ付けているが、ファスナーはシッカリと上げられ、パイロットスーツが服としての役割を復活させて

いた。

「んしょっと、でね？　やっぱり、日本は私達の手で——」

身体を包んでいた興奮は少し残っていたようだが、世間話をしているカレン。

しかし、言葉を続けようとする、斑鳩艦内に休憩の連絡が響く。

流石に人員の全てが四六時中働いている訳も無いので、今動いている艦員と、休憩していた艦員を入れ替える知らせだった。

当然ながら訓練をしていたカレンも休む人員の一人であり、変わりに訓練をする名も知らぬパイロットが声を掛けてくる。

「あっ、カレンさん」

「んあっ、ああ、交代よね」

「また、随分厳しい訓練をしてみたいですね」

「そう？ いつも通りだけど」

「それがいつも通りですか.....？」

代わりとしてやってきたパイロットが見ているのはカレンが流す汗だ。

やはり戦闘訓練をした後に性行為をするのは身体に大きな負担が掛かるらしく、改めて見れば汗が滴る程に流れていた。

「ああ、そう言えば何か身体が汗で気持ち悪いわね.....」

「シャワー空いてましたよ」

「そう？　なら、ちょっと行ってくるわ」

「はい、お疲れ様です」

「ええ、そっちは頑張っってね」

「はい！」

会話の気安さから察するに、先輩と後輩と言える関係だろうか。

やって来たパイロットへ挨拶を終えたカレンは、今度は俺に断りを入れてくる。

「そんな訳だから私はもう行くけど、見学はあんまり危険の無い所で止めておきなさいよ？」

「分かってるって」

「なら、良いけど。じゃ、私はシャワー浴びてくるから」

「おお、じゃあな」

「ええ、またね」

そうして、俺は黒の騎士団で素の表情を見せるカレンと、手を振り合って別れたのだった。